

保育内容「表現」指導法に関する一考察 —グループワークによる劇あそびづくりを通して—

A Study on Childcare Content "Expression" Teaching Method
-Through making drama play through group work-

大竹留美・細川隆史・後藤紀子
Rumi OTAKE, Takashi HOSOKAWA & Noriko GOTO

キーワード：領域「表現」、保育方法、保育内容総論、協働、カリキュラム

要旨

2018年、幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育保育要領が新しくなり、それぞれが時代のニーズに合わせた形で改正がなされた。

本学では学生の保育表現を引き出す活動を実践するために、創作演奏・オペレッタ・劇あそび・ピアノ演奏など、学びの成果を披露する場として、「表現活動発表会」を行っている。科目としては、保育内容「表現IV総合A・B」と位置付けており、一回生に対して実施する「表現IV総合A」では、表現活動発表会や本校所在地の地域にある保健センターや公民館主催の行事など、表現IV総合A科目の演習活動の延長上に位置づけ、履修生全てが何等かの形で「劇あそび」を発表する機会がある。

本報では、その「表現IV総合A」における幼児教育・保育現場の協働性を見通しての学びを促すねらいを持ち、劇あそびをつくり上げて発表するまでのグループでの活動について考察を行い、今後の指導の指針とする。

1. はじめに

2018年4月、幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育保育要領が新しくなり、それぞれが時代のニーズに合わせた形で改正がなされた。

無藤（2017）は、この改訂で「幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園（以下、認定こども園）も日本の大切な幼児教育施設」としての位置づけを行なったことを評価した。幼稚園、保育所、認定こども園に共通する「幼児教育のあり方」をはっきりとした形にしたとともに、「小学校教育との接続のあり方」も明示され、それぞれが幼児教育を行う重要な場と明確にした。

同時に改訂された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下、教育要領・指針）には、1989年以降、幼稚園教育要領や保育所保育指針に盛り込んだ、保育内容「5領域」の考え方を引き継ぎながら、幼児教育において「育みたい資質・能力」の概念を新しく含めることになり、資質・能力を「3つの柱」で表し、幼児教育の充実と改善を図った。これは、教育要領・指針と同じくして新しくなった小学校の学習指導要領（2017）にある「3つの柱」にながためのものであるが、加えて教育要領・指針には、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以

下「10の姿」)として、幼児の具体的な姿を10の項目で確かめられる項目が示され、幼児教育と小学校以降の教育を繋げて見える工夫がなされ、幼児教育から小学校教育への円滑な接続の重要性が記された。

制度上こそ幼児教育・児童福祉として存在しながらも、それぞれ意義を成している3施設であるが、学童期へと接続する幼児期の子どもの発達等の状況を踏まえ、遊びから得られる学びを保障する場として、幼児教育がどれほど期待されているかが確認できるようになった。

これをふまえて、「10の姿」の中の「(10)豊かな感性と表現」を取り出して、幼児教育・保育を学ぶ養成校科目、保育内容「表現」における学修のあり方を見つめたく本研究の着想に至った。「10の姿」内の「表現」について、また「保育をみる視点」とも言われる保育内容のひとつ、領域「表現」を取り出して学ぶことは、幼稚園教諭・保育士・保育教諭を目指す学生にとって、理想の保育を見つけ、保育の振り返り方や子どもに対する視点、また子ども達に寄り添い理解を試みる時などの心強い指針にもなる。従って学生らが、領域「表現」に関しても、押さえるべきところをしっかりと見据え、保育の見る目を養えるような授業展開を行う必要があると考える。

「10の姿」の「(10)豊かな感性と表現」についての解説をみると、「心を動かす出来事などに触れ、感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。」とあるように、子ども達が「表現」をする活動において、保育者が「表現」の視点から幼児の感性をどのような場面で感じ取るのか、子どもの感性の基礎になるものは何かを学ぶために、本学においても複数の「表現系科目」が設置されている。幼稚園等の表現活動の実態に合わせる形で、音楽・造形・身体それぞれの表現を経験することを通じたこれらの科目、「幼稚園教諭2種免許」に必要な単位として「領域及び保育内容の指導法に関する科目欄」に、更には「保育士資格」取得に必要な単位として「保育の内容・方法に関する科目系列」に、それぞれ表現Ⅰ音楽、表現Ⅱリズム、表現Ⅲ造形科目が設置してある事に加えて、「表現」について一体的に学ぶ機会を提供する科目として、表現Ⅳ総合A（1年次生後期開講科目）、表現Ⅳ総合B（2年次生後期開講科目）が設置されている。これらの科目は、表現技術の修得によって学生等の表現にかかわる感性を豊かに、演習活動の中で表現力や技術力を向上する事を目標として、最終的には、豊かな感性と表現を育み、支えられる保育に結びつくことを目指している。

また、本学では学生の保育表現を引き出す活動を実践するために、創作演奏・オペレッタ・劇あそび・ピアノ演奏など、学びの成果を披露する場として、「表現活動発表会」を行なっている。発表内容は、様々な授業の延長上として位置付けており、将来幼児教育・保育現場で活躍するために必要となる表現力を身につけることに加えて、人間関係を構築することを目的としている。表現Ⅳ総合A科目では、表現活動発表会や本校所在地の地域にある保健センターや公民館主催の行事など、表現Ⅳ総合A科目の演習活動の延長上に位置づけ、履修生全てが何等かの形で「劇あそび」を発表する機会がある。

そこで、15名程度で構成した4つのグループ活動を行なった取り組みは、学生等にどのような影響を与えているのかを調査・検討し、保育現場の協働性を見通しての学びを促すねらいを持ち、劇あそびをつくり上げて発表するまでのグループでの活動について考察を行う。

2. 方法

(1) 調査期間

2020年度の後期授業において

(2) 調査対象

本学1回生（58名うち男子8名、女子50名）

最終的な採用件数は（56名うち男子8名、女子48名）であった。

(3) 分析の手続き

質問紙調査を終了したのち、すべての回答を記述した表を作成した。その上で、KJ法（川喜田1966）を用いて集計を行い、分析した。（なお、調査内容については、資料2を参照のこと）

(4) 質問紙調査

表現Ⅳ総合Aの演習授業の最終回の約20分間で、回答を実施した。

3. 結果

授業担当（筆者ら）は、今回の「表現Ⅳ総合A」の演習授業において、シラバスの設定に沿って授業を展開した。その授業の流れは、次のようであった。学生らには、4つのグループを作成しグループ活動をするにあたっての役割分担を決定するように促した。主な役割を挙げると、リーダー・サブリーダー・書記・衣装・音響・照明・道具製作類等である。学生らは、グループディスカッションをしながら、担当係を決定していった。

筆者らは、前置きとして、各役割の分担は、各担当の責任者として活動の流れをまとめていくことであると伝えた。私見であるが、保育者を目指す学生は、それぞれの持ち場においてもリーダーシップを発揮する傾向があり授業回数を重ねるごとに、円滑に活動をしていく様子を見ることが出来た。グループ・リーダー、各々の係のまとめ役に確認して取り組みをする姿が自然にみられ、グループ活動を理解して取り組みを進めている様子がみられた。

グループ活動をスタートさせ、発表までを終了した時点で、質問紙の調査を実施し分析した結果、注目した質問は⑧、⑩-2、⑫、⑭、⑮である。それぞれの質問についての結果を述べていくこととする。

3-1 質問⑧「⑦（グループ活動はうまくできましたか）で選んだ理由を書いてください」の結果

質問⑧においては、「協力」「達成感」「準備」のワードが多く検出され分類することが出来た。すなわちグループ活動を円滑にする事が大切だと感じているものは、「協力」「達成感」「準備」であるといえよう。学生たちは、劇あそびを作りあげるに当たりグループにおける「協力」は欠かすことが出来ないと感じている。発表後のアンケートより抜粋したものが次の記述である。「自分自身をもっと協力できたし、するべきだったから。また、自分のことだけでなく周りのことを考えて、

行動や演技をそれぞれがすべきだったと思うから」自分自身のことのみでなく、グループのことを念頭に置いて活動していくべきであった、と振り返っている。記述を行なった学生は、他の設問に関しても、「協力」を挙げており、今後の活動でその「協力」についての実施をしていくことであろう。また、グループで成し遂げることが出来た喜びを感じており、「達成感」について記述する者が多く存在した。具体的には、「みんなで案を出しながら進めることができたから」「何度も意見を出し合いながら繰り返し」「作品を作る際、何もしていない人があまり見受けられなかったため」「ひとりひとり役割があって、できていなかったら声をかけあったりしたから」などが記述されている。グループで作りたいうえでの達成感であると読み取れる。しかし、初めてのグループ活動であったため戸惑いや不安からなかなか活動を進めることが難しいグループがあることも確認ができた。特に「準備」をもっと早くから進めるべきであったと記述している。具体的には、「全員が作品に取りかかるのが遅く、最後追いこんでやることになってしまったから。」「最初から真剣に取り組んでいなかったから」という記述がみられた。この活動を経験したことにより、次回からは、「準備」を踏まえての活動ができることであろう。

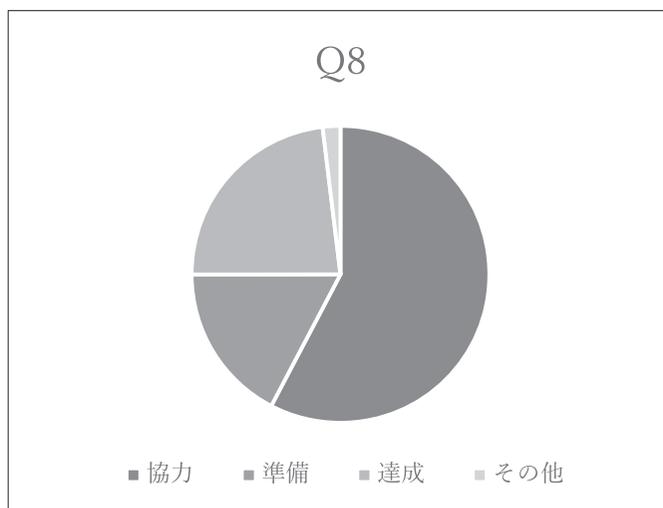


図1 質問⑧より：グループ作りに必要と考えるもの

3-2 質問⑩-2 「あなたは、グループで表現活動をするのは好きですか それはなぜでしょう」の結果

次に、質問⑩について検討する。「達成感」「楽しい」「協力」「好き」「苦手」「その他」「成長」「おもしろい」「発見」のワードが頻出した。今回のグループ活動において、「達成感」を持つ学生が多く存在し、「楽しい」活動であったことを表している。具体的には、「子ども達に喜んでもらえたから。自分自身新しいことに挑戦することで、自信にもつながるから」「ダンスを踊ったり、感謝している人に見てもらうため」「協力してすることであまり話さなかった人と話すようになるから

です。また、達成感を味わうことができ楽しいからです。」「みんなで協力して作ることで、大変さもあるが、終わったときに達成感が味わえる。」などの記述から、この活動において「達成感」を持ったことがうかがえる。同時に「楽しい」という感情も読み取れる。加えて、グループ活動において「協力」が必要であり、実際に「協力」できたことを示唆している。記述としては、「グループで作り発表することで仲間と一緒にできたという達成感が生まれる」「みんなで何か1つのことを成し遂げること、協力することが好きだから。」などがある。次に「好き」「苦手」のワードは同数出現しており、グループ活動については、「好き」で行う者と「苦手」であるが「協力」している者が存在することがいえよう。「色々と表現をする事が好きで、人前で何かをすることが好きだったり好きな事ばかりだったから」「私は劇をすることが小学校の頃から好きだったし、今回とても楽しかった」「皆と一丸となって頑張ることが好きだから。」「人を楽しませることや、なりきったり、たのしいことが好きだからです」これは「好き」であると回答したものである。「苦手」と回答した中では、「人数による。多ければ多いほどできるが増えるかもしれませんが、意見も多くなりプラスになるけどぶつかるが増える」「団体行動自体あまり得意ではない。」「終わってみれば楽しかったが、セリフと踊りを覚えるのが大変だったので、そして個人的に人前が出るのが苦手なので」などがあげられる。数は少ないものの「発見」のワードが当てはまる回答に、「自分の中の自分だけでなく、新たな自分を見つけられるから」というものがあつた。この活動を体験することで、新たな自分を発見したものである。学生にとって、大きな経験であったといえよう。背景にあると考えられるのは、本学が保育・教育者を養成する学校であり、学生の中にもその心情が垣間見られるといえよう。

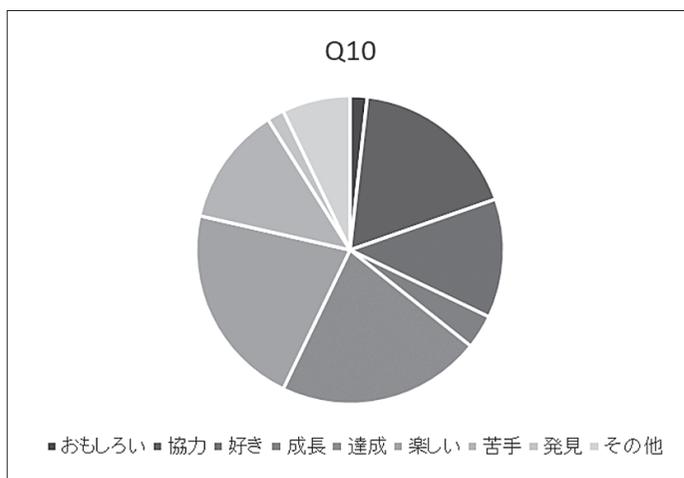


図2 グループでの表現活動について

3-3質問⑫の「今回の活動を通して、劇あそびとは何だと思えましたか ぱっと思いついた言葉を書いてください」の結果

さらに質問⑫についての、学生らの記述をピックアップしながら、検討をする。「楽しいこと」

と記述した学生が多くおり、初めての活動であり戸惑いながらも楽しんで活動していたことがうかがえる。また、劇あそびを作りながら「魅せる」ことにも言及していく様子もこの質問の回答から得ることが出来た。それは「子どもたち一人ひとりの感情を引き出す」「子どもたちの想像力を膨らませるものだと思います。」「班の子達と協力をして子ども達にどんな風にしたら喜んでもらえるかを考える」「子どもに楽しんでもらえるもの。」という記述である。これらは、保育・教育者を目指し保育者目線をもてるように学習してきた学生ならではの記述であろう。また、「協力し合う。助け合い」「それぞれの役割が1つとなって、素晴らしい作品になるもの」「協力性や支え合い、助け合い、積極性が問われるもの」「みんなで作る畑？誰かが水やりサボったら実残らないけど全員でしたら美味しくなる」「みんなで1つの作品を作りあげることで、協調性や達成感を味わえるもの」などのように、今回の活動により、グループで協力して作り上げることを実感していると思われる。記述の中で特徴的なものを挙げると、「劇あそびをしてあまり関わったことのなかった子たちとも関わった。最終的にはとても良い作品になったと感じている。」「普段の生活では感じられないことを感じる事ができる貴重な遊び」である。入学当初4月より、クラスメイトではあるもののあまり接点のなかった者同士が協力し、作品を作り上げた。それは単純な過程ではなかったであろうことは、授業の経過とともに観察してきた。グループ活動をすることが、学生たちの記述から、活動を成し遂げたという達成感を得ていることがうかがえる。また、個々の役割を果たすことも大切であることに気づき、次回への期待につながっていることも推察できる。

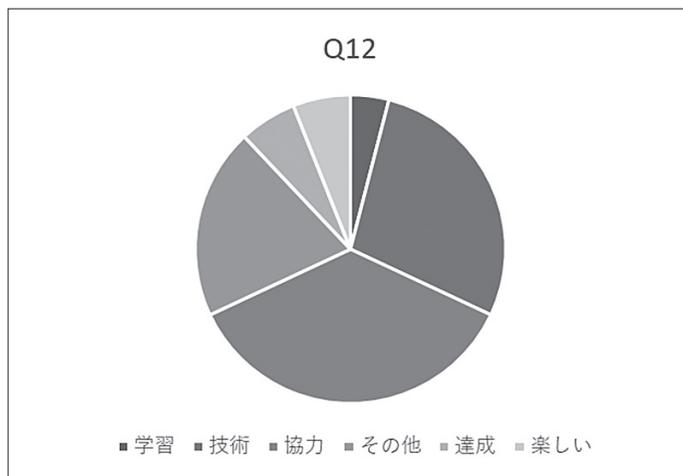


図3 劇あそびに対する印象

3-4 質問⑭ 「⑬また同じような活動をする場合に、必要なアドバイスはありますか（1 ある 2 ない）⑬で「ある」と答えた方、具体的に書いてください」の結果

質問⑭は、「事前準備」「グループ」「モチベーション」「技術」「協力」「リーダー」のワードがみられる。これらのワードからは、学生らが、今回の活動によってどこに問題を感じ取っているかが推察できる。初めての活動であるとはいえ、計画をして、準備に入ることに大変時間がかかり、最

最終的に準備や稽古の時間が短くなってしまったことがあり、「事前準備」を段取りよく進めることが大切であると気づいたものである。「しっかり計画を立てること」「もっと早い段階で決めて、セリフの練習などして発表前ぎりぎりまであせってやるより前もってやって置くべきだと思う」という記述に表れていると推察される。学生主導で「グループ」活動をしたことが、印象深かったことが読み取れる。例えば「もっとみんな協力する（積極的に）もっと案を出しあう」「1人ひとりの個性を大切に、皆で協力すること」「全員が何をしたらよいか、今の状況を把握しておくこと。」「みんなで相談して、役割分担して活動を行う。」「誰か1人、リーダーを皆に声を掛けられる人を選び、リーダー以外の人は協力してリーダーを支えられるようにする。」などの記述からも読み取ることが出来る。

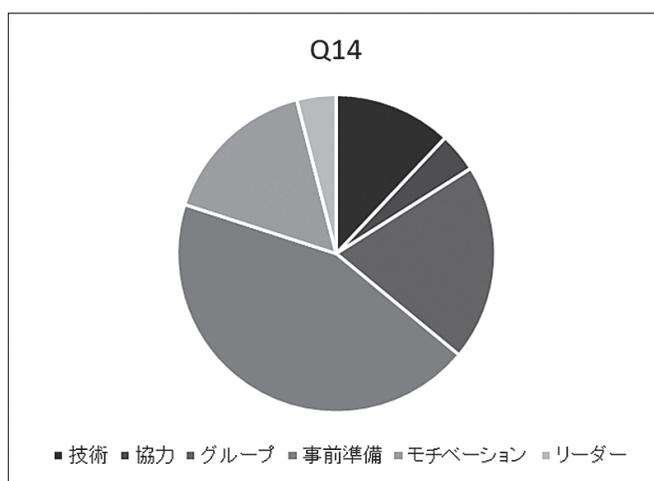


図4 この活動をするにあたり必要だと思うこと

3-5 質問⑮「もし、今後 同じような劇あそびを行うならどのように工夫しますか」の結果

質問⑮においては、「技術」「準備」「グループ」「積極性」「その他」のキーワードがあげられた。圧倒的に「技術」に焦点を置いて考えている学生が多く、その具体的な記述については次のようであった。「どのようにしたら伝わるか工夫する」「ナレーションがすごく大切だと思った。もっと役になりきる。」「衣装にこだわったり、大道具の位置」「会場の特徴を考える」「子ども達をもっとまきこんでできるように工夫する」「見てもらう人に喜んでもらうためにどうしたらいいか」など、観る側にどのように伝えるかを考える学生の記述が多くあった。どの質問にも表出しているが「準備（事前準備）」にまつわる記述が次のようになった。「恥をすてる 楽しんでする 役になりきる 大道具など準備物をしっかり用意しておく。 子ども達にわかりやすいように」「早めに劇をしあげる」「はやく決めてたくさん練習する」「もっと早く取りかかり、みんなでどういったものにしたのか固めてからしていきたいです。」などであった。「劇づくり」を初めての体験で、戸惑いながら進めたこともあるのだが、どんどん計画して進めることを挙げている。次回の活動には、反映されることが期待される。おそらく「グループ」で、学生主導で進める活動の経験は、多くはない

と考えられるので、次のように挙げられた。「大きな枠組みを考えた上で、細かいことを決めていきたい。」「グループでたくさんの意見を出し合う」「大変だけど、リーダーを中心にどんどん進めていった方がいい。」「〇〇ちゃんは〇〇してね」とか具体的に」実際に経験したことで、具体的な行動にまで言及しているので、これもまた次回以降の活動に期待が持てる。

今回の経験を基に今後の活動について、学生たちが主導的にどんどん繰り広げていくことが推察され、学生ら自身の達成感・今後の教育・保育につながる作品が仕上がることを期待してやまない。

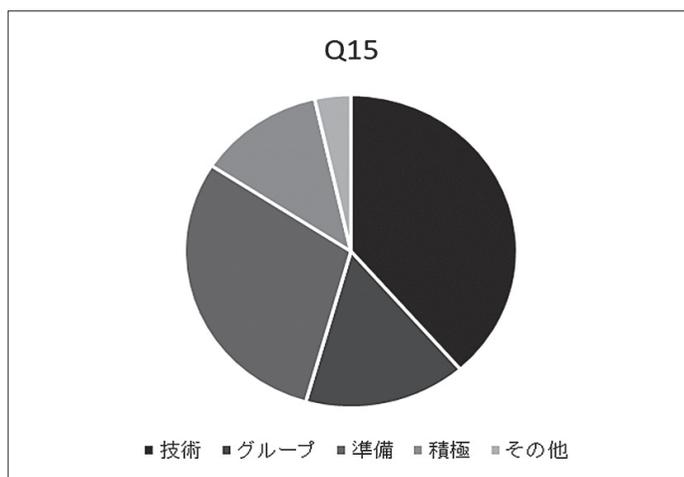


図5 今後の活動に気を付けること

4. 考察

本科目の全体構想としては、人間関係の希薄さが問題視される昨今、学生らには人と人との情緒的なつながりを持ちながら、チームの一員として行う保育の必要性や、地域と交流し合うことの大切さを学ぶ活動を通じて、グループ活動のあり方を重要視し伝えていった。身体表現を中心とする作品を完成度の高いものに創り上げるためには、ひとり一人の真摯な取り組みだけでなく、互いに協力し、目標に向かい努力を惜しまず、切磋琢磨する姿勢が不可欠である。

従って、本発表会や地域活動の取組みは、発表に至るまでの過程を通して、保育者としてのみならず、卒業後社会生活を送る上で必要となる表現力・精神力・行動力・協調性などが育成できると言える。

中教審答申（2015年12月）は、「幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究」の中で、「これからの時代の幼稚園教諭に求められる資質能力について」（表1）を3項目で表した。ここでは、幼稚園教諭と限定されているが、保育所や認定こども園の保育士や保育教諭を含めた保育者養成に求められるものだとも言いかえる事ができる。保育者養成校における学びの中で、実践力を高めて卒業する事を認めざるを得ない状況は当然の事ながら、本学の卒業要件（表2）にも含まれている。

(表1) これからの時代の幼稚園教諭に求められる資質能力

-
-
- (1) 幼稚園教諭として不易とされる資質能力
 - (2) 新たな課題に対応できる力
 - (3) 組織的・協同的に諸問題を解決する力

※中教審答申(平成27年)を参考に作成, 下線は筆者らが作成

(表2) 本学のディプロマポリシー

-
-
- (1) 幼児教育及び保育に関する知識と技能を身につけた者
 - (2) 専門職に相応しい実践力を身につけた者
 - (3) 職業能力を高めていくための基礎を身につけた者

※下線は筆者らが作成

では、保育者養成に求められる実践力、具体的には表現活動における保育者の指導力とは、どのようなものがあるか。厚生労働省(2017)は、「子どもの表現を広く捉え、子ども自らの経験や周囲の環境との関わりを様々な表現活動や遊びを通して展開していくことが重要である」と、子どもの表現に関する活動の重要性を示し、「音楽表現・造形表現・身体表現・言語表現に関する表現技術を子どもや保育との関連で修得できるようにすることが必要」と示している。

表現系の科目における実践力の育成とは何を指すのかと考えた時、造形活動の指導、ピアノ演奏の技術を保育の中に取り入れる、身体表現等の技術力はいうまでもないが、保育者を目指す学生自身の「表現力」と「対人関係の構築」そのものが、これらの3つの資質能力(表1)を測る事に適している。つまりは、表現Ⅳ総合Aの演習授業での学びは、多様な保育の場で対応できる実践力に繋がられると考える。

(表1-③)を概観してみると、「組織的・協同的に諸問題を解決する力」とあるが、保育の質の向上を組織的に検討する方法の「保育カンファレンス」の有用性が注目されている。中坪ら(2010)は、保育カンファレンスを行う効果として、園の中で同僚と学び合い多様な意見を交わすことで、日々の保育を振り返り、新たな気づきを得ることができると指摘している。

2018年、教育要領・指針が新しくなった事により、カリキュラム・マネジメントの充実による保育の質向上が求められるようになった。今後、保育・幼児教育において子どもの学びや育ちに関してもエビデンスが重視され、可視化できる保育の記録や分析によるフィードバックなどが必要となる。ついては、組織としてのカリキュラム・マネジメントおよび保育の質向上のために、保育現場では、同僚との園内研修やカンファレンスが必要となるのだ。

現在、日本の教育現場では、学校教育目標を達成するために、「教師が連携し、複数の教科等の連携を図りながら授業をつくる」「学校教育の効果を常に検証して改善する」「地域と連携し、よりよい学校教育を目指す」の3つの側面を持つ、カリキュラム・マネジメントを充実させることを「大

切にすること」としている。

本報をまとめるにあたり、先行研究を概観してみる。幼稚園におけるカリキュラム・マネジメントについての先行研究の中で、横松（2017）は、次のように述べている。「三つの側面を持つ本格的なカリキュラム・マネジメントを各幼稚園現場で成立させることを目指し、まず、現場に必要とされる思考の仕方について考察し、その上で、必要になると考えられる研究者の協働を構想する。」つまり、「国の教育課程基準の実現と各幼稚園における園の特色のあるカリキュラム創りを両立させる思考の仕方を効率的に習得し、本格的なカリキュラム・マネジメントを成立させるための研究者の協働手順全体を先行研究成果の活用しながら構想する。」としている。先述の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を見通したカリキュラム・マネジメントをしていくというものである。こういったカリキュラム・マネジメントをいずれは、自らで所属する園の構想をしていくのが、幼児教育・保育を学ぶ学生らである。

本学における「保育内容 表現Ⅳ総合」内での活動は、その一環であることはいうまでもない。グループ活動においてもカリキュラム・マネジメントの3つの側面を持つ「保育者が連携し、複数の領域等の連携を図りながら授業をつくる」「保育・幼児教育への効果を常に検証して改善する」「地域と連携し、幼稚園・保育所・こども園がよりよい場所となることを目指す」が、当てはまる。更に述べると、グループにおいて「必要なねらいや内容をグループ（園）で連携し、連携しながら作り上げる」「効果を検証し改善する（PDCAサイクルの確立）」「家庭や地域・外部の資源を含めての連携」である。実際にグループで行なった、ディスカッションは、保育内容のねらいや内容を振り返り・検証し、地域で発表することで連携している。ディスカッションし、作り上げ、検証することは、先述の「保育カンファレンス」に繋がる一連の行程と考えられる。つまり、表現の授業「劇づくり」において、「保育カンファレンス」が繰り返されているといえよう。

最後に、質問調査に検出されたグループ活動に関する特徴的な傾向を見てみる。例えば、「班の子達と協力をして子ども達にどんな風にしたら喜んでもらえるかを考える」という記述である。「協力し合う。助け合い」「それぞれの役割が1つとなって、素晴らしい作品になるもの」「みんなで1つの作品を作りあげることで、協調性や達成感を味わえるもの」などのように、今回の活動により、グループで協力して作り上げることを実感しており、先述のカリキュラム・マネジメントの第一歩となる活動であるともいえよう。また、記述の中で特徴的なものを挙げると、「劇あそびをしてあまり関わったことのなかった子たちとも関わられた。最終的にはとても良い作品になったと感じている。」「普段の生活では感じられないことを感じるができる貴重な遊び」がある。地域との連携により、発表の場で子どもたちと関わった学生の記述である。ここでも3つの側面の一つを体感したものがみられる。回答の記述に見られた「事前準備」「グループ」「モチベーション」「技術」「協力」「リーダー」のワードは、「保育内容 表現Ⅳ総合」において学生らに指導するにあたり、今後の課題として検討していく指標となると考えられる。すなわち、学生らへの指導に関して、「カリキュラム・マネジメント」につながる「グループ活動」の指導をしていくことはその一端となるであろう。つまり、本発表会や地域活動の取組みは、発表に至るまでの過程を通して、保育者としてのみならず、卒業後社会生活を送る上で必要となる表現力・精神力・行動力・協調性などが育成できると言える。

学生らが、将来現場に立った際、教育課程や保育の全体的な計画を動かすことになった際、今回の活動がカリキュラム・マネジメントにつながるかについては、今後の報告に継続して検証することになる。カリキュラム・マネジメントの経験がない、あるいは少ないままでは、カリキュラムを編成することに不慣れのままとなり、今後の保育への影響がでる。教育要領・指針に例示されているような緻密なカリキュラム・マネジメントを実施することは時間的にも能力的にも難しいだろう。特に今回の教育要領・指針の改訂において月・年齢に区分された保育内容を眺めながら、子どもたちの資質・能力を育むために「領域等横断的な視点」として、保育内容と教育課程・保育の全体的な計画を往還しながらカリキュラム・マネジメントを行うために、保育者としてのあり方を今後も授業展開していく必要がある。

参考文献

- 中央教育審議会（2015）「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について ～学び合い高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」平成27（2015）年12月。
- 川喜田次郎（1966）「資料の創造的活用」情報管理 9（3），127-132.
- 厚生労働省（2018）児童福祉法施行規則第6条の二第一項第三号の指定保育士養成施設の修業教科目及び単位数並びに履修方法の一部を改正する件」（平成30（2018）年厚生労働省告示第 216 号）。
- 厚生労働省（2015）指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について，<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000108972.pdf>（2021.1.13.最終アクセス）。
- 松下茉莉香，中村礼香，小松恵理子（2018）子どもの表現活動の効果的指導方法に関する研究 — 身体表現・音楽表現・造形表現を考慮した総合的表現指導の観点から —，鹿児島女子短期大学紀要54，81-90.
- 三好優美子，渡邊洋，長谷川千里，柳田憲一（2018）総合表現（創作オペレッタ）における表現科目の連携：「音楽」「造形表現」「身体表現」の観点から，東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要53，47-62.
- 文部科学省・厚生労働省「保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）」7。
- 文部科学省「幼稚園教育要領解説書」フレーベル館。
- 文部科学省「小学校学習指導要領解説【総則編】」。
- 無藤隆 「平成29年告示幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂について」文部科学省。
- 中坪史典・秋田喜代美・増田時枝・安見克夫・砂上史子・箕輪潤子（2010）「保育カンファレンスにおける保育者の語りの特徴-保育者の感情の認識と表出を中心に-」『乳幼児教育学研究』，第19号1-10.
- 岡健，金澤妙子（2019）「演習 保育内容 表現-基礎的事項の理解と指導法-」，建帛社。
- 横松友義（2017）各幼稚園でカリキュラム・マネジメントを成立させるための研究者の協働の構想，岡山大学大学院教育学研究科研究集録166，41-51.

資料1 本学「表現Ⅳ総合A（保育内容）」シラバス

授業コード： 239	授業科目名： 表現Ⅳ総合A (保育内容)	教員の免許状取得のための選択科目/ 保育士資格取得のための必修科目	単位数：1単位	担当教員：
			授業形式：演習	担当形態：単独
1. 授業のテーマ及び到達目標 幼稚園教育要領・保育所保育指針の領域「表現」のねらい及び内容を理解し、それを踏まえて幼児が経験し身に付けていく内容と指導上の留意点を理解する。子どもの表現の姿やその発達及びそれを促す要因について説明できる。身体・造形・音楽表現などの様々な表現の基礎的な知識と技能を身に付け、豊かな表現につなげていくことができる。				
2. 授業の概要 実務経験のある教員により、保育者にとって重要な資質の一つ、表現コミュニケーションの資質向上を目指す。そのために、グループワークを中心に、協働して劇遊びをつくる体験を通して表現することの楽しさを実感し、楽しさを生み出す要因について分析する力をつける。同時に、子どもの豊かな表現が育まれる保育環境構成及び具体的展開のための技術を習得する。この授業では地域子育て支援活動・表現活動発表会に参加をし、幼児の表現活動に展開させる保育実践力を養う。				
3. 授業計画				
回	授業内容			
1	領域「表現」とは 表現活動について			
2	グループでの作品づくり① 演目作品検討・模擬保育に通じる脚本作り・			
3	グループでの作品づくり② 役割分担・台本作成・準備物作成など			
4	グループでの作品づくり③ 台本作成・音響作成・準備物作成など			
5	グループでの作品づくり④ 台本をもとに言葉や動きでの表現検討			
6	グループでの作品づくり⑤ 言葉や動き、造形表現の検討			
7	グループでの作品づくり⑥ 大道具・小道具・衣装などの作成			
8	グループでの作品づくり⑦ 動き、音響、ナレーション、大小道具を合わせて練習			
9	グループでの作品づくり⑧ 本番を想定して練習する			
10	グループ作品授業内発表と意見交流①			
11	グループ作品授業内発表と意見交流②			
12	グループ作品授業内発表と意見交流③			
13	作品発表を終えての気づきと学び			
14	表現活動の経験から① 「表現」を生む環境をどうつくるか 表現を促す要因とは			
15	表現活動の経験から② 表現を支える保育者の役割 定期試験実施しない。			
○ 作品発表 なら100年会館・地域子育て支援センター・公民館 など				
4. 指定テキスト ・ 演習 保育内容『表現－基礎的事項の理解と指導法－』岡健・金澤妙子（編著）建帛社				
5. 参考書・参考資料等 ・ 「幼稚園教育要領解説」文部科学省（編），フレーベル館，2018年 ・ 「保育所保育指針解説」厚生労働省（著），フレーベル館，2018年				
6. 学生に対する評価 ① 提出物（20%） ② 作品発表（20%） ③ 授業への関心・参加意欲（60%）				
7. 備考・留意事項 日々何事に於いて、意欲・積極的に取り組む。				

